

モーツァルト：無限なる宇宙の創造者を崇敬する汝らが

モーツァルトは 1784 年に友愛を旨とする秘密結社フリーメイソンに入会し、熱心な会員としてフリーメイソンのための曲をいくつも書いた。タイトルから推察されるように本曲も、同じく会員だった作詞者ツィーゲンハーゲンの依頼によって書かれた「ドイツ語の小カンタータ」。モーツァルト最晩年の 1791 年に完成。8 分近い曲だが、楽章として分けられることなく続けて演奏される。

ドヴォルザーク：《聖書の歌》

全 10 曲からなる歌曲集《聖書の歌》は 1894 年の作。前年には最後の交響曲《新世界より》が完成している。アメリカに滞在していたドヴォルザークは名声の頂点にあったが、グノーやチャイコフスキー、親しい友人だったハンス・フォン・ビューローらの訃報に接し、さらには父が病に倒れたこともあり、敬虔な心境になったことが、聖書にもとづく本曲を書く動機につながったのかもしれない。その内的なまなざしは、熱心なカトリック信徒であったにもかかわらず、ラテン語ではなく、チェコ語訳の『詩篇』を用いていることから推察される。

クイルター：《3 つのシェイクスピアの歌》

1905 年に作曲・出版された本作の詩は、第 1 曲「来たれ、死よ」と第 2 曲「おお、わが愛しの人よ」が、シェイクスピア『十二夜』（1602）第 2 幕の道化フェステの歌から、第 3 曲「吹け、吹け、冬の風」が同『お気に召すまま』（1600）第 2 幕の貴族アマンズの歌から、それぞれ採られている。いずれも劇中歌だが、クイルターは内容を忠実に表現した歌曲に仕上げている。

ムソルグスキー：《死の歌と踊り》

1875～77 年にかけてムソルグスキーの友人だった詩人ゴレニシチェフ＝クトゥーゾフの詩に曲を付けた作品。4 つの死の場面が描かれており、第 1 曲「子守歌」は幼い子供、第 2 曲「セレナード」は若い乙女、第 3 曲「トレパーク」は貧しい酔っ払いの老農夫、第 4 曲「司令官」は戦場に斃れた若い兵士たち。いずれも語り部による情景描写のあと、死神が一人称で言葉巧みに死へ誘う構成になっている。